

あわいの時代

能楽師 安田登
やすだ のぼる



私は能楽で「ワキ」という役を演じている。ワキは「脇役」と紹介されることもあるが、ワキとは「分く」人、すなわち境界(分け目)にいる人という。能の主役をシテという。シテ(主役)は、幽霊や神様など、この世ならざる存在であることが多い。彼らはあちら側の世界にいて、普通の人は出会うことはない。しかしワキは、こちらの世界とあちらの世界との境界にいますので、そのような存在にふと出会うってしまい、そこから能の物語が始まる。

あちらとこちらの両方に足をかけている状態を「あわい」という。あわいに似ているものに「あいだ(間)」がある。「あいだ」の語源は「空き処(ど)」であり、AとBの空いている空間をいう。それに対して「あわい」は「合う」を語源とし、両者の重なる空間をいう。

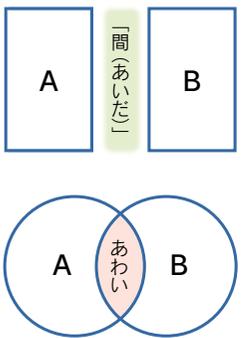
日本は「あわい」にあふれている。たとえば建築におけるあわいは縁側だ。掛詞は和歌のあわいだし、茶室への石組もあわい、雅楽の笙の手移りもあわいだ。

時代の延長線で生活をしている。

その「あわい」の時代にどんなことが起きていたかは楔形文字(シュメール語)や甲骨・金文(古代中国語)を読むことによつてうかがい知ることができ。文字ができたばかりの記録には、文字以前の記憶の残滓が残っているからだ。

文字には欠点もある。その最大のもは、どのような次元のものであれ2次元化してしまうということである。象という3Dの動物を2D化し(さらに線画化し)、それをさらに紙などの2Dの媒体に写したときに「文字」となる。象が動けば次元はさらに増えるが、しかし文字は常に2次元である。要は文字とは、あらゆるものを2次元まで微分することを要求するという性質を持つ。それは他の次元を捨てることを意味する。「微分」を英語で「differentiation」というが、これは「分ける」ことでもある。

そして「分ける」は「分かる」ことでもある。複雑で曖昧なことを「もつと分かるように言え」という人がいる。私たちの脳は現時点では2次元的なものしか理解できないからだ。しかし、その人が「分かった」というまで説明すると、多くの部分を捨



そして現代は、前の時代と次の時代との「あわい」の時代であると私は思う。

前の「あわい」の時代は文字の発明の時代であった。古代メソポタミアでは紀元前3000年頃、古代中国では紀元前1300年頃だ。

文字の発明によつて人類は大きく変わった。私たちが予定を手帳に書くことができるのは文字があるからである。記録も記憶も企画も計算も文字がなければできない。文字は人の脳の機能の一部を外在化し、その機能を拡張した。「心」や「知」も文字とともに拡張された脳の機能である。

家畜の使用も文字の使用とともに加速した。馬に乗って遠くまで、速く行けるようになった。これは身体の外在化、身体の拡張だ。

いま私たちが使っている人工知能や遺伝子技術は、文字によつて引き起こされた脳の外在化がさらに進化したものだ。そして、ロボットやアンドロイドは身体の外在化だ。私たちは、前の「あわい」の

ことになる。しかも、その捨象は恣意的である。

70年〜80年代以降、目を見張るような経営理論、マーケティング理論が出てこない理由もこれが原因ではないだろうか。企業の現場では、いまだにPDCAサイクルやKPIなどと言っている。組織だつて、トップを上にして下に広がる組織が大半だ。これらはすべて図に描ける。2次元元的だ。

これらが時代にマッチしていないことは多くの人々が感じていることだろう。しかし、「じゃあ、どうしろというのだ」と思うだろう。そこで人から答えを求めた時点で、それは2次元的思考になる。

わからないものをわからないままにぐつぐつ脳の中で煮詰めることを孔子は「温故」といった。「温」とは器の中の具材を煮詰めることをいう。すると次に起こるのが「知新」である。

「知新」の「知」は孔子の時代にはまだなかった。あったのは左側の「矢」だけである。「矢」が地面に突き刺さった漢字が「至」である。ぐつぐつぐつ煮詰めていたとき、突如としてまったく新たな考えが出現することが「知新」である。この過程を孔子は「知」と名付けた。

孔子は「心」という文字ができて500年後に生まれた。まだ「あわい」の余韻の残る時代である。「知」は「あわい」の時代に生まれた。

しかし、孔子の時代からすでに2500年以上も経っている。温故知新や知を超えるものの出現を私たちは創出しなければならぬ。そのために必要なのは長い時間と、そして不安定な状態を保ちながらも思考を続けるという胆力であろう。「あわい」の時代は不安の時代でもある。

時の調べ Essay

略歴

1956年千葉県銚子市生まれ。ワキ方の能楽師として活躍するかたわら、甲骨文字、シュメール語、論語、聖書、短歌、俳句等々、古今東西の「身体知」を駆使し、さまざまな活動を行う。著書に『あわいの力「心の時代」の次を生きる』、『コーヒーと一冊「イナナナの冥界下り」』、『すごい論語』、『三流のすすめ』(以上、ミシマ社)、『身体感覚で「論語」を読みなおす』(新潮文庫)、『能650年続いた仕掛けとは』(新潮新書)、『野の古典』(紀伊國屋書店)、『見えないものを探す旅 旅と能と古典』(重紀書房)など多数。